

5-2					
主題	見て、触って、体験。次世代介護機器への距離を縮める				
副題	次世代介護機器の複数レンタルにて、本当の欲しいを見つける				
キーワード 1	レンタル	キーワード 2	関心の向上	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 青芳会 今井苑
発表者(職種)	石岡康宏(介護支援専門員)
共同研究(実践)者	大島貴之(介護課サブマネジャー)

電 話	0428-31-3800	FAX	0428-32-3871
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	青梅市にある特別養護老人ホームで昭和 63 年 8 月に開設しました。地域とのつながりを大切に、今井地区の中の「今井苑」として親しまれています。近隣の保育園の園児や中学生ボランティアも訪れることもあり、ご入居者と職員や地域の方が家族のような温かい雰囲気の中で生活をされています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

私たち今井苑では、少子高齢化による介護の担い手不足の影響を例にもれず受けており、求人活動と共に、次世代介護機器の導入にも力を入れていた。東京都の「次世代介護機器導入促進支援事業」に申し込み、見守り機器の導入を行ったが、介護職員から「機器の操作が分からない」「壊したらどうしよう」という声が聞かれ、次世代介護機器の便利さの浸透に時間を費やしていた。今後、担い手不足の補完、介護負担の軽減を考えるにあたり、こんな機器があれば便利だというニーズ自体が挙がらない。令和 4 年に次世代介護機器アンケート(便利さ、介護負担の軽減度合い、導入してほしい機器等)を実施したが半数の 50%しか回答が無かったなど次世代介護機器への関心の無さが課題となっていた。

そんな中、令和 5 年 1 月 26 日に開催された、全国老人福祉施設協議会の主催する JS フェスティバル in 栃木に参加。そこでのシンポジウムにて厚生労働省が介護ロボット普及の一端として介護ロボットの貸し出し事業を行っていることを知った。

介護職員が次世代介護機器を嫌煙する背景として、実際に介護ロボットを知らないからではないだろうか、身近で試してみることで関心が高まるのではないかとこの思いにより、色々な機器の「次世代介護機器の試用貸し出し」を始めることにした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

実際に介護ロボットを見て触って体験することで、介護職員の介護ロボットに対する抵抗感が薄れるのではないかと、「これは便利で良い」という関心が高まるのではないかと、また、介護職員から「この機器がほしい」といった、積極的なニーズが聞かれるのではないかと期待する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

次世代介護機器を実際にレンタルし介護職員が試してみる。

実施期間：令和 5 年 5 月から令和 6 年 4 月まで実施

実施内容：ベッド上にて起き上がるとモニターで動きが見える機器 約 2 週間レンタル

移乗介助時に電動アシストが入り、腰の負担が軽減される機器 約 2 週間レンタル

トイレに入ると自動で検知し、排泄状態が記録される機器 約 1 ヶ月レンタル

実施するうえで、介護職員が興味を示しやすくするために①見守り機器、移乗アシスト機器、排泄自動記録機器と目的や内容の違う機種を選択し違いを出した。②事前に機器の取り扱いの説明を受け、使い方のマニュアルを作成、使い方の指導を行った。③令和 4 年に実施した、次世代介護機器アンケートを再度実施した。

《4. 取り組みの結果》

①最初は機器の性能の驚きから入り、徐々に夜勤業務を行う職員からは、モニターでの見守り機器、移乗アシスト機器に高い評価が聞かれた。排泄自動記録機器に関しては、排泄確認の難しい入居者の健康管理に看護職員からの高い評価が聞かれた。②設定など細かい説明を指導者が事前に聞いておき、介護職員には使い方や、機器の表示の見方のみ説明したため、簡単な操作で様々な機能やデータが確認できると好評であった。③令和 4 年に実施した次世代介護機器アンケートでは「便利です」という端的な評価が多く、50%の回答率だった。今回、次世代介護機器のレンタルを終えた令和 6 年 6 月に同じアンケートを実施。回答率が 85%と上昇し、「〇〇の時に便利です」「〇〇できる機器が欲しい」など具体的で建設的な意見が多く聞かれた。

《5. 考察、まとめ》

次世代介護機器レンタル実施前は、購入に対するニーズ調査を介護職員に行っても「どんな物があるか分からない」といった意見が多く、福祉機器展の見学や次世代介護機器のカatalogの提供、1 日だけお試しでの説明会など開催したが、「機器が大きすぎる」「操作が難しい」「これなら普通にやった方が良い」といった否定的で受け身の姿勢が多くみられた。

今回、次世代介護機器のレンタルを試してみて、「あのモニターでの見守り機器が数台あれば夜間に頻回に見に行かなくてよくなる」「実際に身に着ける機器よりも自動で記録してくれるシステムの方が有難い」「〇〇さんにモニターでの見守り機器があると怪我の予防ができる」など具体的に入居者をイメージした機器の導入について、より現実的な意見がアンケートにて多く聞くことができた。アンケートの回答率の上昇や肯定的な意見が多く聞かれたことが、次世代介護機器が介護職員に認知されて始めていることを表しており、この取り組みの大きな成果となった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

第 1 回全国老人福祉施設大会・研究会議～JS フェスティバル in 栃木

シンポジウム「デジタル介護：ロボット・ICT と共存する次世代の高齢者福祉の魅力」

《8. 提案と発信》

現在、介護を行う職員も年々、高齢化している。ベテランと言われる職員層には介護ロボット、ICT という言葉自体にアレルギーを感じていることも事実である。この取り組みは、とにかく試してみるという所からスタートし最初の垣根は取り払えたと考える。今後、介護の担い手は人とロボットとの共存が必然になってくると感じる。この発表が介護ロボット導入の第一歩になることを期待する。